

原作: あきらふとし / イラスト: 眞人

デザイン協力:つくねる

メスメリズム
-暗殺者ヤミアと癒しの伝道師-

あきら ふとし

MESMERISM

メスメリズム

登場人物紹介



ヤミア

褐色の肌を持つエルフの女暗殺者

人間とエルフの世界が繋がった後、急増した奴隷エルフ売買や暴力犯罪を取り締まる特殊組織に所属し、潜入・諜報・暗殺を主任務とする。

冷静沈着で感情を表に出すことは少ないが、その内面には長年の差別と搾取によって刻み込まれた深い諦観を抱えている。

任務のためなら自身の肉体すら武器として標的に近づくことも厭わない。一方で、繰り返される潜入任務によって心身は摩耗しており、快楽や愛情に対しても歪んだ感覚を抱えている。

人間社会への不信感を抱きながらも完全に憎み切れない曖昧さをあわせ持ち、その矛盾が彼女自身を苦しめる。





MESMERISM

メスメリズム

登場人物紹介

ウェルズ

ヤミアの所属組織の重役

冷戦沈着な老紳士。
理想よりも秩序を重んじ、必要とあらば違法任務や暗殺も許可する現実主義者。ヤミアの能力を高く評価しており、異常事件の背後にあるルゥ・コンラッドの痕跡を長年追いかける。

ルーカス大佐

ヤミアの所属部隊の責任者

実務を重んじる軍人で、感情よりも結果を優先する指揮官。
厳格だが非情ではなく、規律と責任を何より重んじる。
ヤミアの実力を信頼しておりその危うい精神状態にも気付きつつ見守っている。

ルゥ・コンラッド

“伝道師”を名乗る謎の男

かつては人間とエルフの社会を繋ぐ広報者として活動していたが、現在は古王国で暗躍する。
穏やかで整った外見の裏に、人の思考と欲望を少しずつ変えていく力を持つ。痛みと願いを肯定することで他者を導き、静かな癒しの言葉で人を堕としていく、極めて危険な存在。

オジン・コンドン

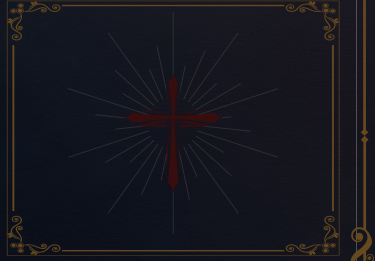
エルフとの貿易業を営む富豪

表向きは友好的かつ紳士的な実業家だが、裏では奴隷エルフの売買に深く関与する非道な商人。保護という名目で若い女性エルフを食い物にしており、下卑た性格の裏に鋭い観察眼を持つ。
ルゥ・コンラッドとの接触をきっかけに、女性を魅了する異質の力を得たと豪語する。

ナシャン

古王国で暮らす白色エルフの女性

穏やかで柔らかな雰囲気を持ち、ヤミアにも偏見なく接し支える存在となる。
やがてルゥ・コンラッドの癒しに惹かれていき、ヤミアとの絆は友情とも依存ともつかない複雑な形へと変化していく。



疲れたる者よ。
重荷を負いし者よ。
すべて我がもとへ来たれ。
我は汝らを休ませよう。

誘惑に陥るな。
目を覚まし、祈れ。
心は燃えている。
されど肉体は弱い。

『マタイによる福音書』11.28 26.41

第一部

一

「……いったい、いつになったら褐色エルフちゃんは来るんですかッ!?」

貿易商で財を成したオジン・コンドンは、部下に不満をぶつけていた。コンドンは室内を歩き回り、落ち着かない様子を見せていた。彼は話を続ける。

「ぼくはね、スケベするまでの、この悶々とした時間が嫌いなんだ。これ以上、長引くとどうなるか、エルフちゃんが来たら分からせてあげますよぉ……」

コンドンは事前に予約していた高級娼館のエルフを手配していた。予定時間を過ぎていた訳ではないが、娼婦がやって来るこの微妙な待ち時間が落ち着かなかった。

我慢ならないので、部下を呼び出して時間通りに来ない理由を問い詰めたところ、既に娘は屋敷に来ているのだという。

貿易事業で成功したコンドンの立場上、脅迫や誘拐などの可能性も考えられる。高級娼館というのは、ただ美しい娘を取り揃えているということだけではなく、お忍びで楽しむ顧客に対して安心・安全に感じてほしいという配慮から情報の取り扱いも徹

底されている。部下から、その旨の説明を受けてもコンドンは納得しなかった。
「それじゃあ、ぼくもエルフちゃんも興が冷めてしまうじゃないか。すぐにここに呼んで来なさいっ」
かしこまりました。そう言って、コンドンの部下はしぶしぶ引き下がり、下階にいるエルフの娘を呼び寄せる。
「いらん心配とはこのことだな」
こういった遊びをする場合、普通は隠れて遊ぶのが一般的ではあるが、オジン・コンドンは、大っぴらに娼婦と会うことを公表している人物だった。本人としては、女好きを隠しもせず遊んでいるほうが潔いと思っているだけでの話である。女好きが商売女とヨロシクしているのが何がいけないのかという理屈だった。
しかし、そんな考えを他所にコンドンの身が心配という理由で、彼の部下たちは楽しみを阻害していることがある。彼らなりの厚意なのかもしれないが、断りなくエルフ娘の身元を調べていたのは気に入らなかった。
そんな折、扉からノックの音が聞こえた。
「おっ！　きたきた♡」
「……失礼します」

褐色肌のエルフの娘が入ってきた。下着姿だが大事なところが隠れておらず、ほとんど裸だった。

恥ずかしそうに胸や股間を隠そうとしているが隠しきれず、胸や陰毛が見え隠れするのが堪らない。エルフという種族は見た目は若くて綺麗だが、中身はスレてることが多いので初々しい反応をしているのが珍しいと思ったのが最初の印象であった。

「おっほ♡　こりゃまた、どスケベな格好の褐色エルフちゃんが来てくれたもんだねぇ」

「本日はご指名ありがとうございます。リリーと呼んでください」

リリーと名乗ったエルフの娘は恥ずかしそうに挨拶をした。

「もう、堅いあいさつは抜き抜き。ふぅ〜ん、ホントにエッチだねぇ♡」

コンドンはスキンシップ代わりにお尻を触る。ソフトにタッチしつつ、しかしお尻の感触はしっかりと味わう——そんないやらしい触り方だった。

「あぁん、これはコンドン様がっ……」

コンドンは事前に用意していた下着を身につけるよう言いつけていた。リリーのお尻を揉みくだし、その柔らかさにコンドンは満足気な様子だった。

「うんうん、スケベなお尻で大変よろしい。こりゃあ、見事な安産体型でございます



よ。この下着も君に似合うと思ったんだ」
「あ、ありがとうございます……」
コンドンは、執拗な手回しをしている。リリーの表情も少し赤みを帯びはじめる。
「ぼくはエルフちゃんが大好きでねぇ。みな若くて綺麗で……ところでリリーちゃんの年はいくつかな」
「えっと……」
「失礼なのは重々承知なんだけど、エルフちゃんたちの年を聞くのを止められなくてね。君の話、もっと聞かせてくれないかな」
「今年で八十八です。……すみません、人間換算での年齢に慣れていなくて正しいか分からないんですけど――」
「とっても、若いね♡　ちなみに男性経験はどれくらいなのかな？　おじさんに話してみなさい」
「……三人ほどです。もしかして初めての娘が良かったですか？　もしそうでしたら――」
リリーの言葉が続かぬうちに、コンドンが答える。
「とんでもない、今までの男たちと比較して、ぼくはどのくらい気持ちの良いエッチ

が出来るか楽しみでしょうがないんだよ」と自信満々に答える。衣服の上から指でなぞるようにリリーを愛撫していく。
「その三人はとても幸せ者だ。ぼくは四人目の幸せ者という訳だ」
リリーの反応を待つ前に、コンドンは話をまくし立てた。
「今までで一番気持ちよかったエッチについて聞かせて欲しいな。君みたいなエッチな子だと他の男は放っておかないだろうに」
コンドンは愛撫しながら質問する。リリーの息が少しずつ荒くなっていく。
「そ、それは……」
「ん、どうしたのかな？　もっと知りたいな、リリーちゃんのこと」
快楽を忌避する様子のリリー。コンドンは興奮した様子で愛撫を続けていく。
「んぅ、ふぅ……」
「本当にエッチだねぇ、こんなかわいいエルフちゃんと過ごせるなんて――僕(ぼく)ぁ、幸せものだよ」
リリーは快楽に身を任しているのかコンドンの質問には答えない様子だった。
「さあ答えて、リリーちゃん！」
コンドンの愛撫が激しくなる。リリーのなかに眠る雌の本能を呼び起こす愛撫だっ

た。
「んんぅ、昔エルフの方と……」
「ほう、君たちエルフは人間と違って、あまりエッチしないからね。大事な人だったのかな？」
「その、白色エルフの方と……」
リリーは小声で答える。白色エルフという言葉を聞いてコンドンは肌の色の違いだと察する。
「なるほど、リリーちゃんも隅に置けないねぇ」
コンドンは彼女の反応を察してそれ以上は何も答えなかった。
「ところで、」
コンドンの視線は、リリーの股間に視線が移っていく。
「おやおや、どうやらリリーちゃんのここも盛り上がって来ている様子だね。イヤらしいお露で一杯だ」
「そんな、えっ……」
「隠しても、ノンノン♡　こんなエッチな下着を着けてたら、おじさんにバレちゃうねぇ」

リリーの下半身に手を回しはじめる。
「むわぁっとして、ほんわかな香りが漂ってくるようだ。エッチな女の子の臭いだね……」
コンドンは自身の下着を脱がすように促してきた。パンツ越しでも、コンドンの性器が盛り上がっているのがはっきりとわかった。
「リリーちゃん、ほらおじさんのも見て。こんなに盛り上げってきたよ」
パンツを脱がすと反りあがった性器が眼前に広がっていく。先走り汁で先端が濡れて蒸れた雄の匂いが撒き散らされる。まさしく雌を蹂躙するかと言わんばかりの猛々しさであった。
「……大きい。それに先端から」
「うん、リリーちゃんがエッチだからおじさんも興奮して先走り汁が出ちゃっているよ」
リリーは何も言わずにコンドンの股間をさすり始める。
「ああ、いいよぉ、リリーちゃん……」
コンドンは、リリーの首筋にフレンチキスをする。
「あっ……」

「うぅん、いい反応」
コンドンが囁きながら首筋を責めていくと、リリーは小さな喘ぎ声をあげている。
「おほ、たまらんねぇ」
リリーは喘ぎ声を上げながらもコンドンの下着越しに愛撫していく。彼女も自身の仕事をまっとうしていく。
「ほっほ、おじさんを見くびってはダメだよ。リリーちゃんにも気持ちよくなってもらいたいからね」
コンドンは、リリーの乳房をイジり始める。
「さっきから見えていたリリーちゃんのおっぱい、本当にエッチだなぁと思って見ていたんだよね」
「そ、そんな」
コンドンは乳首を弄りつづける。だが、リリーも手を止めることなく、彼の股間を愛撫し続けていた。
「リリーちゃんの乳首が硬くなっていくのを感じるよ。コリコリしてて美味そうだ」
「――コンドン様のここも、硬くなっていますよ」
「はは、バレてしまっては仕方ないな。これをどうするつもりか、おじさんに見せて

ごらん」
「わかりました……」
リリーは頷き、コンドンの物に顔を近づける。むわぁと香しい臭いが立ち込める。まぎれもない雄の臭い。
「君のせいでこんなことになってしまったよ。僕の自慢のむすこを相手にどうするのかな」
リリーはコンドンの亀頭部分をこねるように刺激を与えていく。
「ふっふっ、ぼくのむすこはどう思う？」
「……すごく熱いです」
リリーは照れるようにコンドンの物を握る。皮膚越しに脈打つ感触が伝わってくる。雌を屈服させる意思を強く感じる。恍惚としたリリーの様子を見かねて、コンドンは彼女の乳首を軽くつねった。
「んぅ～～♡」
「スキだらけだよ、リリーちゃん。おじさんの魔の手が迫っているんだよ。先にイッたらお仕置きだからね」
コンドンは猫なで声でリリーに告げた。

「いやぁ、ぅ……ん」
リリーは何とか返事をしていた。
「うんうん、素直でよろしい。それじゃあ、いくよリリーちゃん」
コンドンは首筋にキスをしながら右手でリリーの下腹部に手を伸ばす。そして左手で胸をイジり始める。リリーもコンドンを握って応戦する。
「おっ！　リリーちゃんも激しくしてきたね。そんなにお仕置きされたくないんだね」
「ぅ……ん」
「よぉ〜し、おじさん頑張っちゃうぞ」
コンドンの動きが激しくなっていく。
「おじさんのおまんこ弄りはね、他のエルフちゃんにも好評でね。もうみんなメロメロなんだよ」
「そんな話しないで……」
「ぅぅ〜ん、リリーちゃん最高だよ。いままで色んなエルフちゃんとエッチしてきたけど、君はその中でも最高だねぇ」
「……んぅ」

「ほひっひぃ、た、たまら〜ん！　こんなエッチな子を見過ごしてたなんて、お、大当たりだよぉ！」
　コンドンの愛撫はヒートアップしていく。
「……あっ、だめイクッ！」
「だぁめ！　まだ、イっちゃだめだよ……リリーちゃん」
「あっあっ……イッ……！」
　リリーは不意を突かれるようにイッてしまう。軽い痙攣が起こっている。
「あ〜あ、イッちゃったね、リリーちゃん」
　コンドンはリリーの舌を絡めて、右手でイジっていた秘所を引き続き責め続けた。
「だ、だめ、まだイッたばっかだからっ！」
「ほっひひ、正体露わしたね。余裕がなくなってきてるよッ♡」
　コンドンは嬉しそうに囁いた。
「あっ、ほんとうにヤメぃぐっ……！」
　痙攣。二回目の絶頂。リリーの足はガクガクだった。
「この勝負、僕の勝ちだね。さあ、ベッドでお仕置きタイムだ」
「べ、ベッドってどういう……だって、さっきのがお仕置きだったんじゃ……？」

コンドンは指を立ててチッチッチと鳴らした。
「おじさんはイッてないからね。コイツでリリーちゃんをヒィヒィ言わせるよ。ふふ、リリーちゃんが興奮しているのが伝わってくるよ……こんなオチンチンに突かれたらどうしよう、そんな顔だね」
リリーは乱れた衣服のまま、自然とコンドンを受け入れるような体勢を取っていた。それは、雌としての本能が導いた姿だったのかもしれない。コンドンは性器の先端をリリーの下腹部に擦りつけた。リリーはかすかにうめくような声を漏らす。
「いやらしい、まるでぼくの性器に吸いつく生き物みたいだね。本当に興奮するよリリーちゃん」
「い、いや……」
「口では嫌がっても、身体は正直なんだね。素直になっちゃいなよ、リリーちゃん」
「あっ」とリリーは少し声色が上がった。
「ふふ、ビックリしたかい。だけど、まだ先っぽしか入っていないからね」
「えっ？　だ、だって」
リリーは混乱した様子だった。コンドンの性器があまりに大きかったのが、その理由なのかもしれない。

「いっくよ、リリーちゃん」
ズブブッと性器を入れ込んでいく。リリーはやや苦悶な表情をしていた。コンドンはそんな彼女の様子を見て嬉しそうだった。
「あ、あっ……♡」
「おっほ、リリーちゃんも気持ちいいかな？　僕のデカチンと高速ピストンにどこまで堪えられるかな」
コンドンの言葉に、リリーはもう何も返せなかった。ただ、押し寄せる快楽に耐えることで精一杯の様子だった。
「いいねぇ、たまらんねぇ……」
コンドンは徐々に腰を強めて小気味の良いリズムで打ち込んでいく。
「あっ……や、め……♡」
「声色が色気づいてきたね、おじさん嬉しいよ……」
「あぅ、むぅ……♡」
コンドンにキスをされてしまう。なすすべもなくリリーは受け入れていた。
「ちゅぅ……ああ、リリーちゃんおいしいよぉ♡」
コンドンは唾液まみれのキスを続ける。リリーは嫌そうな素振りも見せずにキスを

受け入れる。
「あっ、んぅ……」舌と舌を絡めてのキス。リリーの色気づく声。
「リリーちゃん……ああ、たまらんよぉ……」
コンドンの動きが激しさを増し、リリーの表情からは余裕が消えていった。コンドンは耳元でささやく。
「リリーちゃんの耳も美味しそう。キスしちゃうねっ」
「んぅ、ダメっ♡　ピアスしてるからっ」
コンドンの機嫌を損ねずに否定する。コンドンは特に気にした様子もなく、
「そっか。じゃあ一杯気持ちいピストンしちゃうからねっ。種付けピストン、よーい、スタート！」
コンドンは念入りにリリーの下腹部を責め立てていく。
「あっ……、ぃぃ……♡」
「ほひっ、良い反応だねぇ……さあ、おじさんのチンポは気持ちいいと言いなさい！」
コンドンは語気を強めて問いかける。
「っおじさん、……の……いいっ♡♡」

「うん？　聞こえないなリリーちゃん。それとも言葉に出ないくらいおじさんのチンポが気持ちがいいのかな」

コンドンは誰が主導権を握っているのかハッキリさせるために激しく突いていく。

「ぁ、……くぅ……♡」

コンドンはめざとくリリーの反応を逃さない。ピストン運動を速めていく。

「っ……ぃ……イク、イク……♡」

コンドンはリリーの様子をみて笑顔になる。

「また、イキそうなのリリーちゃん？　そんなにおじさんのチンポが気持ちがいいんだ。さあ、私はコンドン様のおチンポ奴隷ですと言いなさいっ！」

リリーの身体は次第に紅潮し、言葉にも余裕がなくなっていった。

「コ、コンドン様のおチンポ奴隷ですっ……だめ、イク、イク……」

イクという言葉を繰り返す。身体の中に快楽が駆け巡っている。そんなリリーの様子はコンドンにも伝播していく

「あぁ、たまらないよリリーちゃん、最高ぉぉ！」

高速ピストンを続ける。そんなことを続けていれば自ずと自身の射精感は募るばかりだが、コンドンは腰を振り続ける。



「っ……ぁ、これっ……イっく……」
リリーの身体が震えた。イカされてしまった。連続で絶頂に達した彼女の身体は、汗ばんで、声さえも枯れ気味だった。
「……っやめ、イッたから……もうイッたから……！！」
リリーの声は虚しく、コンドンの腰はさらに早さを高めていく。
「あぁ……リリーちゃん、もぅ、だいすき♡　おじさん、もっとイジめちゃうぞ！」
乳首をイジられる。リリー、またビクンと身体を揺らす。
「っあ……、ヤメ、もうイキたくない……」
「ああ、スケベだねぇ、リリーちゃん……！　声では否定してもリリーちゃんのメス穴はまだ欲しがってるみたいだ……」
「っぁ……っぁ……♡」
リリーの身体は震えていた。連続イキしてしまったのだ。もはや声を出す余裕はなく彼女はコンドンの前でだらしない姿を披露しまった。
リリーがまたイッてしまってもコンドンは腰を止めない。コンドンは嬉しそうに彼女に語りかける。
「あ〜ぁ、またイッちゃったんだ、リリーちゃん。とってもイヤラシくて最高だった

よ」
「でもね、おじさんまだイッてないの。だから僕が射精するまで、何度もイッてね、リリーちゃん♡」
コンドンはリリーの乳首を弄っていた。リリーはイッたばかりの身体をビクンとはねていた。
「おっ、ここが敏感になっちゃったみたいだねぇ」
「あぁ、ぅぅ……」
言葉にならない快楽を貪っているリリーに言葉は届いていない様子だった。
「リリーちゃんが反応してくれないと、おじさん詰まらないんだけどっ」
コンドンはリリーの乳首をねぶりはじめる。
「っ……あぁ」
「言葉になってないよ、リリーちゃん！　おじさんおオチンチンはイライラしてるんだよ！　このままピストンしながら、リリーちゃんのエッチなオマンコに大量射精キメちゃうよッ！」
「……ぅ、あぁ……♡」
「イエスだね、リリーちゃん。むふぅん、たまらんなぁ……」

「……う」
コンドンの乳首ねぶりで、リリーの反応は鋭い。そんな彼女の様子を見てコンドンもビクンと身体を揺らし始める。
「ああ、たまらん……っ！　おじさんもそろそろイキそうだ」
「っ……」リリーはイクのを我慢しながら苦悶な表情をしている。
「このまま中に出すぞ。おじさんの愛を受け取れッ♡」
「ぁっ……ダメ……っ！」
コンドンは彼女に確認を取らずして中出ししようとする。
「あぁ、ヤバッ！　リリーちゃんイッグ……！　妊娠しろ……！」
コンドンの射精が、リリーの中で濃密に響いた。
「おぉ出とるッ……！　ほ、ほひぃ……たまらんちん……」
自身の性器を引き抜く。満足な射精が出来て雄としての充足感。言葉では優しい言葉を投げかけつつ、一晩買った雌を性的消費していくのは堪らないと言わんばかりの態度だった。一方、リリーは肩で息をしている。言葉を言わずとも分かる。彼女は——快楽に、堕ちていた。

二

「ほひ……僕ちん、そんなに良かったのかな」
リリーは、息もたえたえで頷くのみだった。
「まあ、もっとも他のエルフちゃんも同じような反応なんだけどねっ♡」
コンドンはベッドから起き上がり、全裸のまま居間の方まで歩いていく。リリーも少しずつだが、呼吸が落ち着き始めていた。
「は、はぃ……すごかったです……」
リリーはぐったりとしながら、ようやく身体を起こす。コンドンは彼女の言葉を聞いて、嬉しそうに話し始める。
「実を言うとね、ぼくは最近まで、エッチが下手だったんだ」
「えっ、そんな風にはとても……」
コンドンの突然の告白に、リリーは首を傾げるような仕草をして答える。
「そうだね、いきなりこんな話したら戸惑うよね。でもね、この話には続きがあるんだ」
「――話の続き？」

「ぼくの仕事が君たちエルフと貿易業を営んでいるのは知っているよね」
「は、はい」
「そんなときに変わった男に出会ったんだ。不思議な男と言い換えてもいいのかもしれない」
「不思議な男ですか」
リリーは興味津々な様子でコンドンの話に耳を傾ける。コンドンは彼女の表情が興味を示しているようだと察すると、そのまま後ろ向きの状態で冷凍庫から氷の塊を取り出す。
リリーは酒を注ぐために、コンドンに向かおうとするも彼は制する。
「君も飲むかい」
「……ええ、お願いします」
リリーは笑みを浮かべて答える。コンドンはアイスピックを取り出し、机のうえで氷を砕き始める。彼は話を続ける。
「その男は広告代理店の人間でね。君たちエルフのプロモーションを行っていたんだ。エルフは見た目が若くて、綺麗な女性ばかりだという認識だけではなく、他の側面からもエルフが魅力的だと宣伝し新たなビジネスを作っていく。そんな仕事をしている

と男は言っていたよ」
「わたしたちには馴染みのない文化とは聞いています」
リリーは裸のままコンドンの後ろまで近づきコンドンの背中に身体を重ねていく。
「おっほ、リリーちゃん大胆だねぇ。いま君の分も注ぐからね」
コンドンは砕いた氷が入ったグラスにウイスキーを注ぐ。グラスで乾杯し、リリーが先にグラスに口を付けるとコンドンにキスを迫る。
「んふぅ、リリーちゃんエロすぎぃ。これじゃあ、おじさん早くも二回戦に突入しちゃうよぉ」
「話の続きはベッド……でしょ？」
リリーの提案にコンドンは頷いた。
「うんうん、いっぱい話してあげるからね」
リリーの囁きにコンドンは続きを語っていく。
「そう、それで、その男にエルフとの商売について聞かれたから当たり障りのないことを話していたよ。そしたら、男は『あんた、エルフの女をモノにしたいかい？』って聞いてきたんだ」
リリーはやや怪訝な表情になる。そんな様子を見てコンドンは話を付け加える。

「だから、てっきり奴隷エルフの売買について語ってるのかと思ったよ。無論、僕はそんな商売に手を貸していないし、男のいきなりな提案には驚いたよ」

コンドンは饒舌になっていく。それは彼女と身体を重ねていた時とは違った雄弁さを物語っていた。

「だけど、ぼくは正直な人間だからね。『ああ、出来るもんならしたいね』と笑いながら答えたんだ。エルフの女をモノにしたくない男なんていないだろうって具合にね。そしたら、彼はこう答えたんだ。『エルフの女を虜にする力を与える。どう使うかはおまえ次第だ』って。それからなんだよ――」

「っ……あん♡」

「ほっひひ、こうやってエルフちゃんをイカせるのが上手くなったんだ。あの男の言葉を聞いてから自分の身体じゃないように感じるんだ」

コンドンの言葉が終わると、そのままリリーに勃起した性器を見せつける。

「さあ、リリーちゃん、二回戦に突入だよ。もう、ぼくなしじゃイケない身体にしてあげるからね♡」

コンドンはそう言って、ギンギンに勃起した性器を、彼女の下腹部にじっくりと押し当てた。

「――残念だけど、それはできない相談」
「へぇっ？　出来ないって、どういう、」
コンドンの言葉が言い終わる前に首筋に鋭利なものが突きつけられていた。そのまま、彼女はコンドンを押しのけコンドンを拘束する。手にはアイスピックが握られていた。コンドンの首筋にピックの先端がぴったりと当てられていた。彼の顔色は青ざめていた。
「お前が望んでるような女じゃなかったということは確かね」
彼女の言葉は、先程までの慎ましさは鳴りを潜めていた。冷たく淡々とした口調だった。
「ぼ、ぼくを騙してッ！」
コンドンは自分の置かれた状況にやっと気付いて声を荒げる。その瞬間、コンドンの首筋にアイスピックの先端が刺さる。突然の痛みにコンドンは悲鳴を上げかける。ピックの先端には赤い液体が数センチ付着していた。
「騒ぐな。お前の殺しが目的じゃない。わたしが知りたいのは、先ほどまで喋っていた男の情報だ。二回戦は、その男の話で盛り上がろうじゃないか」
「――だ、だれが殺し屋ふぜいにッ！」

彼女はアイスピックを首筋に刺し込んでいく。先ほどと同じ箇所に、今度はより深く、アイスピックの先がコンドンの首筋に食い込んでいく。
「ひィッ！」コンドンの悲鳴が喉まで出かかる。
「選択肢はない。喋らないなら殺す。これからもエルフと下らん遊びや奴隷エルフの売買を続けたいなら、素直に話したほうが身のためだ」
彼女の容赦ない問答にコンドンは震えながら、口を開き始める。
「お、男のことは何も知らない。ほ、本当だッ」
「さっきまで語ってこと以外、何も知らないと」
「ああ、身元も調べさせたが情報なんてほとんどなかった。奴は広告代理店の人間と名乗ったが、ぼくと出会った時点で既に退職していた。調べてすぐに分かったことだ」
彼女は表情変えず次の質問を投げかける。
「男と連絡は取れるか」
彼女の質問にコンドンは首を横に振る。
「いいや、あの男なら出て行ったよ。ここで出来ることは全てしたという簡単な置き手紙を残して……。世の中に知識を広げる伝道師のように彼は旅立ってしまったとい

う訳だ」
「――伝道師」
彼女は奇妙な言葉に引っ掛かる。
「ああ、奴は自分を伝道師だと名乗っていたよ。この世に癒やしをもたらすのだと。そして、ぼくは女を虜にする能力を与えられたんだ」
「女を虜にする能力だと。ふざけるのも大概にしろ」
彼女は語気を強めた。
「ふざけてないさ。君だって気持ち良くなっていたじゃないか。あの男の能力のお陰だよ」
「お前の妄言でどれだけのエルフが犠牲になったと思っている。エルフの人身売買に手を貸し、あまつさえ自分は関わっていないと言い切る。お前は最悪の手合いだ」
「ぼ、ぼくは適切な仕事をしていたまでだ。ぼくは他の奴隷商人とは違う。エルフちゃんにも優しくしていたし、彼女たちも僕といる方が安全だったんだ……」
「適切な仕事。自分の罪を認識することも出来ないか」
「き、君になら分かるはずだ……褐色肌のエルフが今までどんな目に遭ってきたか。ぼくは、君の善き理解者になれるんだよ」

「自身を理解者だと言って、善人と振る舞う奴なんて信じられんな」
「き、君に言った言葉は真実だ。ぼくのところにいれば生活は保証するっ！　ふっひひ、何ならぼくの愛人にだって……」
コンドンは、ニタァと笑みを浮かべた瞬間――
「もう喋るな」
アイスピックで首筋を刺されて、コンドンの意識は消えた。少量の血だけ流れて彼が死んだのを確認すると彼女は次の行動に移っていく。

三

死んだコンドンをベッドまで移動させる。出血は少なかった。持参したバッグから止血用のシールを取り出し、首筋に貼ると、一時的ではあるが出血は止まった。
パッと見たくらいではこの男が死んだかどうかは分からないだろう。このコンドンと呼ばれた男は自分が殺されないと言われて安心したのだろうか。
わたしは嘘をついた。
当初の目的は、オジン・コンドンの暗殺。この男は毎日、お嫁と称して若い女を買

っていた。それもエルフの娘ばかりだ。中には奴隷として売られたエルフと承知のうえで買ってもいた。そういった情報があったので、わたしがコンドンの暗殺に向いていただけの話だ。

そして、コンドンの他に、もうひとつ目標Bというターゲットもいた。それが先ほどコンドンから聞きだした妙な男だった。

目標Bの情報を聞き出せた時点で、コンドンは殺すつもりだった。だが、それは無駄だった。コンドンの持っている目標Bの情報は大したものはがなかったからだ。

耳に付けていた骨振動型のイヤホンの電源を入れると、雑音混じりだが回線先に繋がる。

〈ヤミア、定時連絡が入っていない。首尾はどうなった〉

「少し時間は掛かったが処理はした。これから屋敷を出るので迎えを頼む」

〈手配する〉

リリー改めてヤミアは、コンドンの様子を再度確認する。布団を被せて首筋の傷を見えないようにしている。顔だけ覗かせると、まるで、ただぐっすりと眠っているだけのように見えた。

哀れな男だったな。

自分は、女としての武器を使って、この男に近づき殺した。ただ、それだけだ。この作戦のために、会員制の娼館クラブに入り込んで、指名されるまで機会を伺った。男性経験の少ない雌のエルフ、それに自身の肌の色からみて、好きもののコンドンなら、指名されるまで時間の問題だった。今回のような生娘のようなものを演じられるか不安だったが、結果的に杞憂だった。男は、いつだって、この手の娘が好きなのだ。

ノックの音が聞こえた。コンドンの部下だろう。コンドンの殺しは、さして問題ないが、警護をどう切り抜けるかは、苦労するだろうと想定していた。

扉を開けると、やはり、コンドンの部下が現れた。コンドンの声が聞こえないので見に来た様子だった。

「少しマッサージしましたら、疲れていらっしゃったのか、そのままリラックスして眠られてしまいました。起きるまで時間が掛かると思いますので、わたしはこれで……」

わたしは、それとなく扉の向こうで深い眠りに入っているコンドンを見せる。そんな様子を見て部下の男は納得した様子だった。

念のためと思ったのか、室内に入ろうとするが、わたしの裸を見て室内に入るのを止めた。着替えていたら、室内まで入ってくる様子だった。

助かった。中まで入ってこられたら、殺すしか選択肢が残らなかった。
「早く着替えて準備しろ」
部下の男はそう言って扉を静かに閉めた。
屋敷の外に出ると、見送り用の車が待ち構えていた。それは、組織（システム）の仲間が手配してくれていた車だった。わたしは無言で乗り込み、屋敷を後にした。
わたしは仲間の運転手に顛末について報告する。コンドンは処理したこと。屋敷の護衛は、コンドンが殺されたのに気付くまで、まだ時間はかかること。そして目標Bは現れず、既にこの屋敷から立ち去ってしまったこと。先ほど分かったことを淡々と語っていく。
「ご苦労。新たな報告があるまで待機していろ」
運転席への報告が終わると、ただ時間が過ぎていくのを待った。暗い車中で、わたしは眼を瞑ると、そのままリラックスするように気持ちを落ち着かせていく。
『奴は自分を伝道師と言っていたよ。この世に癒しをもたらすのだと……ぼくは女を虜にする能力を与えられたんだ』
コンドンの言葉がフラッシュバックする。
癒やしをもたらす伝道師。そんな言葉が、いつまでも頭の中で駆け巡っていた。